



「うつ病」のお話

特集

頑張り屋さんのご用心

対談 患者さんも、家族も、病気と向き合う人が
自分らしく生きられるように。

子どもとAYA世代サポートセンター
医療的ケア児支援センター
センター長
フリーアナウンサー

安田 謙二 × 柘田 ひとこ

気になる子どもの視力低下

島大病院 × 益田赤十字病院
総合診療医の育成について
出雲そば 荒木屋
健康コラム「胃腸を整える春野菜のお弁当」

ひとやすみ♪



島大病院の医師たちが、 ラジオとケーブルテレビから役立つ医療情報をお届け！

地元密着型のラジオ&ケーブルテレビに、島大病院の医師たちが出演！ 当院のさまざまな部門の医師たちが、専門分野の最新医療情報や当院の取り組みなどをわかりやすくお話しています。YouTubeでの聞き逃し・見逃し配信もしていますので、家事や仕事の合間にぜひチェックしてみてください。

エフエムいずも
80.1MHz

島大病院
みみより
ラジオ

SHIMANE UNIVERSITY HOSPITAL
MIMIYORI RADIO

毎月 第2・4木曜 17:15~17:30

〈初回放送〉第2木曜 〈再放送〉第4木曜

地域密着のラジオ局「エフエムいずも」にて、毎月島大病院の医師などをゲストに、最新の医療情報を楽しくわかりやすくお伝えしています。聞き逃し配信はこちら▶



icv

島大病院 ちょっと気になる
健康講座

Shimane University Hospital Lectures on Health

毎月 月内随時放送

〈初回放送〉第1木曜 17:30~18:00

※コミュニティチャンネルの番組表をご確認ください。

出雲ケーブルビジョンにて、島大病院の医師たちが、月替わりのテーマについて治療法・予防法などを詳しく解説しています。見逃し配信はこちら▶



※放送日時・内容は予告なく変更となる場合がございます。

島大病院フリーマガジンしろさぎのアンケートにご協力をお願いします。

74号からリニューアルした島大病院広報誌「しろさぎ」は、当院の医療情報はもちろん、地域医療の連携といった院外での取り組みや、こどもの医療・地域のお店・医師の素顔などを幅広くご紹介することで、当院が地域のみならず、身近な存在となる一助となれればと考えています。「島大病院があるから安心して暮らせる」と実感していただける病院を目指し、今後も「しろさぎ」を通じて皆さまに役立つ情報を発信してまいります。そんな「しろさぎ」を、地域とのコミュニケーションツールの一つとして、より親しみやすい冊子にするため、ぜひみなさまの声をお聞かせください。

- こんな時どうすればいいの？
- こんな症状についての対処方法が知りたい
- 聞きたいけどなかなか聞けないお悩み
- 病院とは関係ないけど、この場所をみんなに教えた



アンケートにご回答頂いた方の中から
「KAnoZA詰め合わせ」を差し上げます！

抽選で
5名様



アンケートは
こちら



※写真はイメージです。内容は変更になる場合があります。
※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご回答頂いた個人情報はアンケート以外の目的以外では使用いたしません。

INFORMATION

第46回 中国・四国地区 国立大学病院長会議を開催しました

第46回中国・四国地区国立大学病院長会議が2月22日に当院で行われました。各大学病院長が集まり、病院運営環境の変化や医師の働き方改革について協議し、文部科学省から大学病院を取り巻く諸課題について、特別講演が行われました。そのほか、各大学病院での諸課題について情報交換が行われました。





患者さんも、家族も、 病気と向き合う人が 自分らしく生きられるように。

島大病院では、病気と向き合う子どもや若者を治療以外の面でもサポートしています。心安らげる場所や自立支援を提供し、親御さんやきょうだい児のケアも。小児科医として子どもたちの移行期医療に尽力している安田謙二先生に、取り組みについてお聞きました。

子どもとAYA世代サポートセンター
医療的ケア児支援センター
センター長
安田 謙二
Kenji Yasuda

対
談

フリーアナウンサー
柘田 ひとこ
Hitoko Masuda

小児センター病棟のブックコーナー

入院している子どもたちが行き交う廊下にブックコーナーを設置。絵本や児童書を取りそろえています。ロングセラーの名作から最新の人気絵本、英語の絵本など幅広く選書。

柘田 小児センター病棟にある若者世代の患者さんのためのお部屋「AYA（アヤ※）ルーム」、とても落ち着きますね。こういった空間があるのは子を持つ親として安心感があります。

安田 病室ではカーテンを閉めて退屈そうにしていた子ども、同世代が集まるこの部屋では見違えるほどのも素敵！

よく喋るようになります。同じ病気の仲間とつながって、情報や気持ちを共有している様子を見ると、病室以外の居場所は本当に大切だと感じます。

安田 AYA世代は15〜39歳の世代を指し、思春期の15〜19歳、青年期の20〜39歳を指すのでしょうか？

この年代は進学、就職、結婚、妊娠、出産、子育てなど、さまざまなライフイベントとそれに関係する悩みがあります。がんや白血病の場合には妊孕性（にんようせい）の温存について話し合わなければいけないことも。世代ごとに悩みがあり、個別の支援が必要です。

柘田 心と体が成長する思春期から熟成した成人まで、年代が幅広いんですね。人生がめまぐるしく変わる

世代だから細やかなケアが必要だというのが想像できます。「子どもとAYA世代サポートセンター」はどのような取り組みをされているんですか？

安田 設立のきっかけはがん患者さんとその子どもの支援でしたが、現在はがんに限定せず、循環器疾患の患者さんなども対象に支援しています。支援対象はご本人はもちろん、その保護者・きょうだい・お子さんなども含みます。例え

ば、AYA世代は病気を治療しながら子育てをしている人もいます。そのお子さんは心のケアが必要なのことも多いので、病状理解や仲間同士で気持ちを語り合うワークショップなどを行っています。

柘田 病気の親御さんがいるお子さんは想像を絶するストレスを抱えていると思います。病気を受け止めながら、同じ立場の子ども同士でつながりを持つ機会があるのはいいですね！

※AYA…Adolescent・Young Adultの頭文字をとったもので、15歳〜39歳の世代を指します。



自分の人生を
歩んでいくための
移行期医療

柘田 こちらでは10代の患者さんの「移行期医療」を大事にされていると聞きました。

安田 小児科での受診から大人の医療に転換していくことを「移行期医療」と呼び、二つの柱があります。

す。一つは、小児科で診ていた病気を成人科で対応できるように医療体制を構築していくこと。もう一つは自立支援です。私たちは小児科医は親御さんに向かって説明などをすることが多いのですが、ある程度の年齢になると、患者さん本人に自分の病気のことを理解してもらう必要があります。病気を自

分ごととし、今後予測されることを把握して自ら判断していけるよう、段階的に準備していく必要がある。私たちはそこに注力し支援しています。

柘田 そのためにどのような働きかけをしていますか？

安田 例えば、中学生ぐらいの患者さんでは「移行期子エックシート」を使って、病気や治療の理解度をチェックしています。到達点に応じて、主治医や子どもへのケアを専門とする「チャイルドライフスペシャリスト」と面談したり、薬剤部のスタッフが薬を飲む理由を説明したり、その人に必要な自立支援をしています。

柘田 特別支援学級がない学校なら新規で立ち上げて、形を整えて、看護師など必要な人材を手配しなければいけない。やることごとくがたくさんあつて時間もかかります。「どんぐり」では医療的ケア児コーディネーターが適切な時期に助言し、必要なサービスや機関を紹介。患者さん・ご家族と、行政、学校、福祉などをつなぐ役割を担っています。

て、「この年齢で高校に進学する」「大学に進むならこの年は受験勉強をする」「この年齢で就職する」「そのとき親は何歳か」……とこの先のことを書いて、病気の受容とともに将来をイメージしてもらいました。

柘田 先を見通せると、そこに向かって頑張ろう、ステップアップしていこうと思えますよね。少しずつ自分自身のことを理解しながら、先生たちと一緒にチームで向き合っていくという環境は勇気をもらえるでしょう。

安田 必要があれば退院後も外来でフォローします。復学してから不登校などの悩みが出てくることもあるので、そんなときはAYAチームが相談に乗ります。院内には「子どものごころ診療部」もあり、心理的なサポートをしながら主治医にフィードバックすることも。年齢とともにアイデンティティを確立していく中で、自分の

安田 人生を歩むためのサポートをしています。

柘田 治療だけでなく、心のケアや、退院後の生活のこと、さらにその先を見据えた相談に乗っていただけですね。私も子どもが入院したことがあり、親としてこのような環境は心強いです。

医療的ケア児と
その家族を
総合的に支える

柘田 AYA世代のサポートセンターとは別に「島根県医療的ケア児支援センター」「どんぐり」というものがあるそうですね。「医療的ケア児」という言葉、ここ数年で耳にする機会が増えました。どんなお子さんたちなのでしょう？

安田 鼻から栄養の管を入れたり、胃ろうをしたり、痰の吸引やインスリン注射が必要だったり、医療的な処置を生活の一部にしているお子さんたちを指します。以前は病院や施設で過ごすことが多かつ

たのですが、家庭に戻れるケースが徐々に増えてきました。そうすると、「日々のケアを誰がやるのか？」という問題が出てきます。ご家族の頑張りだけではとても続かない。そのため支援体制のシステムをつくろうという気運が高まり、医療的ケア児支援法が制定されました。「どんぐり」では、患者さん本人だけでなくその支援者からの相談も受け付けています。

柘田 医療的ケアが必要な子どもたちが保育園や小学校に行くためのサポートも行っていると言います。

安田 はい。退院したら最初は家の生活に慣れるので「精一杯ですが、そのうち幼稚園や保育園に通ったり、小学校に入ったり、そうすると学童も必要になったり……。段階によって多様な支援が必要に。実は医療的ケア児を学校に入れようと思うと、一年程度の準備期間が必要なんですよ。そんなにかるんですか！

柘田

柘田 私の子ども周辺の、医療的ケア児と一緒に過ごせる学びの環境がまだないようです。これからは、多様な人たちが一緒にいる空間で子どもたちがお互いを認め合い、カバーし合うような環境が普通になっていく時代が来ると思います。

柘田 特別支援学級がない学校なら新規で立ち上げて、形を整えて、看護師など必要な人材を手配しなければいけない。やることごとくがたくさんあつて時間もかかります。「どんぐり」では医療的ケア児コーディネーターが適切な時期に助言し、必要なサービスや機関を紹介。患者さん・ご家族と、行政、学校、福祉などをつなぐ役割を担っています。

安田

柘田 子どもの周囲には、医療的ケア児と一緒に過ごせる学びの環境がまだないようです。これからは、多様な人たちが一緒にいる空間で子どもたちがお互いを認め合い、カバーし合うような環境が普通になっていく時代が来ると思います。

病気を抱えた子ども、
家族、きょうだい、
笑顔で暮らせる支援を。



子どもとAYA世代サポートセンター
医療的ケア児支援センター
センター長
安田 謙二

1967年生まれ、出雲市出身。松江赤十字病院や国立循環器病研究センターを経て、現在は島根大学医学部附属病院で子どもとAYA世代サポートセンター、医療的ケア児支援センター長を務める。主な研究分野は先天性心疾患（小児、成人）、移行期医療。



フリーアナウンサー
柘田 ひとこ

1973年生まれ、隠岐の島町出身。山陰中央テレビのアナウンサー時代は山陰の人気情報番組やバラエティ番組、ニュース番組等、幅広い分野で活躍した。現在はフリーアナウンサーとして活動中。

Column コラム

高校生も院内で授業が受けられる！
テレプレゼンスロボットkubi（通信機能内蔵ロボット）



長期入院している子どもたちの学習機会の確保のため、小中学生には「院内学級」がありますが、義務教育ではない高校生にはありません。Zoomなどで現籍校の授業を受講することもできますが、黒板の字が見えにくい、先生の話が聞きづらいというデメリットがありました。そこで、当院では最新機器「kubi」を導入。kubiを学校の机に置き、病室からカメラの角度やズームなどを自由に操作することで、よりリアルに授業に参加でき、休憩時間に友達とおしゃべりしたりすることも可能になりました。



勉強の進度への安心感はもちろん、「自分の世界は病院だけに限定されないんだ」という気持ち病気に向き合う力にもなりそうですね！